

日本における人口移動の研究

巫 靚 (WU Liang) *

日本における人口移動研究の始まりは 1980 年代に遡る。その集大成は 1993 年に岩波書店から出版された『岩波講座 近代日本と植民地』の第 5 巻『膨脹する帝国の人流』である。これは日本の学術史上初めて日本帝国期における「人の移動」の全体像を描くことを目標とした研究書であり、しばしば人口移動研究の「パイオニア」と称され、それまで研究が蓄積されてきた日本人の北米、南米、満洲移民以外にも、朝鮮、東南アジアへの日本人移民及び日本の植民地統治に伴い発生した台湾人、朝鮮人などの移動の問題についても言及がなされた。また女性の移動から日本の植民地統治について論じていることも本書の特色の一つである。

一方、こうした歴史学の動きから刺激を受けて、その後、社会学や経済学などの分野からも動きが見られるようになった。現代日本における人口移動をメインの研究対象とする研究が次々と発表され、在日ブラジル人や中国人などについての研究がその代表である。

2003 年前後から歴史学から再び新しい動きが現れた。「引揚げ」というテーマについて大量の一次史料の復刻や編著が出版された。加藤聖文の編集した『海外引揚関係史料集成 (国内篇、国外篇・補遺篇)』全 37 巻の復刻資料がその代表的な成果である。

また、それとほぼ同時期に歴史社会学者の蘭信三の呼びかけによって「日本帝国をめぐる人口移動」の研究グループが発足し、マクロな社会変動による人口移動研究からミクロの角度から人々の移動にまで注目し、それまで注目されていなかった移動の多様性を発見し、植民地史研究に大きな示唆を与えた。また、その後、帝国期だけではなく、日本帝国崩壊後の移動の状況についてまで研究の視野が広げられ、数々の編著が世に出された。代表的な成果は『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』(不二出版、2008 年)、『帝国崩壊とひとの再移動 引揚げ、送還、そして残留』(勉誠出版、2011 年)、『帝国以後の人の移動—ポストコロニアリズムとグローバリズムの交錯点』(勉誠出版、2013 年)である。

筆者の研究はまさに以上をその研究上の背景として始まったのである。比較的に多く取り上げられている日本人や朝鮮人と比べると、中国人や台湾人の移動についてはあまり注目されてこなかったと言える。筆者は特にその中の台湾人に注目し、1895 年から 1952 年までの約 60 年間ににおける台湾人の移動の実態を解明し、日本帝国がその移動にどのような影響を与え、またその移動は台湾人にとっていかなる意味をもっているのかを検討してきた。そこから今までと異なる日本帝国像が現れてくることを期待している。修士の段階では、筆者は日本帝国崩壊直後の 1945 年～1952 年という連合国占領期に注目し、その段階の台湾人の動きについて整理を行った¹。今までの「祖国回帰」の単一方向の移動のイメージと異なり、実は 1947 年に起きた「二・二八事件」などの影響で日本に渡航・再入国した台湾人もいたことを研究から明らかにした。現在は時期を遡って、植民地期における台湾人の移動について整理を行なっている。

* 京都大学人間・環境学研究所博士課程、日本学術振興会特別研究員 DC2。

¹ 巫靚「日本帝国崩壊直後の人的移動—在日大陸籍者と台湾籍者の移動の諸相を中心に (1945～50 年)—」『社会システム研究』第 17 号 163～178 頁、2014 年。同「戦後日本をめぐる中国大陸籍者と台湾籍者の移動—占領期 (1945～52 年) を中心として—」『移民研究年報』第 21 号、2015 年。